

No.21



2010.12

(目次)

| | | | |
|--|----------------------|-------|------|
| ● 巻頭言 | 副研究科長 | 前平泰志 | 2 |
| ● 研究ノート | | | |
| 教員から | 教育認知心理学講座 准教授 | 野村理朗 | 3 |
| 院生から | 比較教育政策学講座 博士後期課程2年 | 隼瀬悠里 | 3 |
| ● 社会人院生から | 臨床実践指導学講座 博士後期課程1年 | 高橋寛子 | 4 |
| ● 臨床教育実践研究センターから | 臨床教育実践研究センター 特定助教 | 高嶋雄介 | 4 |
| ● 事務室から | 専門職員(総務掛長) | 谷川嘉奈子 | 5 |
| ● 図書室から | 専門職員(図書掛長) | 梶山暢子 | 5 |
| ● グローバルCOE：ブータン王国教育調査 | 比較教育政策学講座 教授、ユニットB | 杉本 均 | 6 |
| ● 教育実践コラボレーション・センターから | コラボレーション・センター関連 特定助教 | 趙 卿我 | 6 |
| ● 留学生から | 生涯教育学講座 修士課程1年 | 宋 佳 | 7 |
| ● 和田名誉教授受勲 | | | 7 |
| ● 諸記録 | | | 8~10 |
| ①おもな出来事 ②入試結果 ③学位授与件数 ④人事異動 ⑤寄附金受入 ⑥科学研究費補助金 | | | |
| ⑦オープンキャンパス2010開催 | | | |
| ● 諸報 | | | |
| 新任教員・事務職員紹介 | | | 10 |

巻頭言

副研究科長 前平 泰志



部局広報委員会から原稿の依頼があった。私個人への依頼ということではなく、副研究科長として「何か書け」、ということのようである。せっかくこのような機会をいただいたので、この際考えていることの一端を披露して大方のご叱正に委ねたい。

来年度から、京都大学の講義開講日は小・中学校の入学式や始業式の日より早くなり、夏休みを迎えるのは小・中学校の終業式の日より遅くなるのが常態化するだろう。すでに今年度もそうになっているが、それが来年度からもっと厳しくなりそうだ。

この問題は、全国のどの大学もここ数年、認証評価を受けるために授業回数の確保を要請されており、頭を悩ませられてきたようなので、ひとり本学にだけ降ってわいた問題というわけではない。しかしながら、「対話を根幹とした自学自習」を理念とする本学にとって、この課題はなんとも皮肉な課題だとしか言いようがない。

すでに、部局の意見も提出され、全学の委員会のワーキンググループでも時間をかけて議論されてきており、来年度実施に向けての最終段階にあたるときに、今更ながらこのようなことを書くのはルール違反のそしりを免れないのだが、しかし言うべきことは言っておかねばならない。

そもそもなぜ、半期15週の講義を行わねばならないのか。大学設置基準第二十一条のなかに「…一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし」とあるのが、どうやらその根拠らしい。大学の講義は週一コマ90分の授業を、半期15回行って2単位を付与されることになっている。そしてこの90分授業を2時間とみなして計算しているのである(私の学生時代は掛け値なしに120分授業だったが、120分を目一杯使われる先生は少なかったように記憶する)。

そうだとすると、2時間(本当は1.5時間だが)×15回=30時間が2単位分に相当するためには、90時間(1単位の学修時間×2単位)−30時間=60時間が、授業時間外に学修する時間、つまり学生の1授業科目の予習、復習に本来充てられなければならない時間なのである。

しかし私には、これは現実にはありえない途方もない与太話のように思われる。その理由は以下の矛盾にある。

矛盾1. そもそも1単位の取得のために45時間の学修を必要とする根拠であるが、この45時間という数字は、決して教育的な根拠から出されたものではないということは、声を大にして強調しておきたい。この数字は、かつての1週間分の標準労働時間

を基に算出されたもののようだ。今、労働時間から学修時間を根拠付けることの是非を問わないとしても、この標準労働時間自体が変わっている現在、大学設置基準の根拠自体がいかかわしいと言わざるを得ない。単位制度の実質化云々を言うのなら、まずもって実態に見合うように、設置基準自体の見直しを図るべきではないか。

矛盾2. 1週間で1単位なら半期15週では15単位しか修得できないはずであり、2単位の講義科目に換算すれば7.5科目しか修得できないことになる。ところが、大方の学生は、7.5科目以上の科目数で15単位以上を修得しているのが現実である。だからこそキャップ制を敷いて、学生に履修科目数の制限をすべしという向きもあるが、しかし、それは話が逆であろう。もし設置基準どおり厳密に、半期15単位、年間30単位しか取れないのだとすれば、4年間で120単位しか取得できず、設置基準の定める卒業要件の単位数124を満たせなくなってしまう。設置基準どおりに行っている大学がないのはそのためだ。このように、もともと守ることが不可能なルールを作っておいて、それには目をつぶり、一部の箇所だけの整合性を図ろうとするのは、愚の骨頂としか言いようがないのではないだろうか。

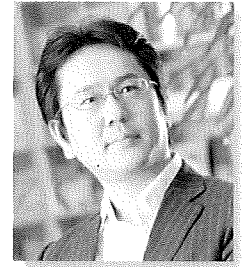
矛盾3. どの科目も半期15回を完全に満たすことが要請されるために、曜日による授業回数不均等をなくさなければならぬことが至上命令である。ハッピーマンデーの導入などでこの曜日ごとの不均等は一層亢進されているからだ。したがって、振替休日ならぬ(授業の)振替曜日を余儀なくされる。国民の祝日が平日同様の授業日になるといったことが起こってきている。大学にいるものは国民ではないのか、大学を国民と何とか切り離そうとしているのだろうか、うがった見方をするのは私一人だろうか。

紙数が尽きた。どこを切り取っても同じ顔の出してくる金太郎飴のような平板な時間を15回ともかく積み重ねることが大学の教育だと信じて疑わない人は、本当の「自学自習」をした経験がない人なのではないだろうか。「対話」や「自学自習」は回数を積み重ねることから自由になったときに初めて沸き起こってくるのだということを学生たちにこれからも伝え続けていくために何ができるのか、あらためて考える時期に来ているようである。

研究ノート

教員から

教育認知心理学講座 准教授 野村 理 朗



私たちは、社会のダイナミズムのなかで環境を評価し、そこへ適応するための行動反応を獲得しています。その結果、適応が良好であれば肯定的、そうでない場合には否定的な感情が生じ、その後の行動反応がさらに調整されます。この10年は、そうした感情や認知にかかわる自己制御 (self-regulation) に注目して、認知神経科学のアプローチから一貫して取り組んできました。とりわけ脳機能を視覚化するイメージング法 (brain-imaging) において、顕在的なところの働きから、意識に上らない潜在性、ときには一致しないそれらの在りようを根拠を見出す好機に恵まれました。

90年代後半の黎明期を経て、脳のイメージング研究は、「現代の骨相学」という批判にさらされながらも、心理構成概念や理論に根拠をあたえる方法論として市民権を得、その一角を担うまでに発展しました。こうして (一般化された) 心の鳥瞰図は完成へと向けて大きく前進する一方、個人差の心理・生物学的な基盤にかかわる課題は多く残ります。とくに社会的な事象は、物理的なそれに比べて複雑で予測困難であり、複数の構成要素間の

相互作用を特徴としています。ゆえに、社会的な生存方略として洗練されてきた認知システム、およびこれを支える脳の前頭前野を中心とした機構は、個人間の分散が大きく、その複雑な様相は、科学的な難問の一つとしてわれわれの前に立ちほだかります。

この心理学の基礎的研究、生命科学を包括する大きな課題は、従来の脳機能計測の方法論に依拠するだけでは解決が難しい。そのように感じ、近年は、遺伝子の (塩基配列の) 個人差を解析するイメージング・ジェノミクス (imaging-genomics) と呼ばれる方法論を導入し、研究を進めています。今後はこれに環境因をリンクする実証研究を重点的に行うことにより、ブレークスルーが得られるのではないかと期待をもっています。それは理論と実践を融和し、内外の最前線を牽引する本研究科において見出せる大きな可能性であり、より一層の力を注いでゆきたいと意を新たにしております次第です。

院 生 から

比較教育政策学講座 博士後期課程2年 隼 瀬 悠 里



早いもので、大学院に進学してから5年が過ぎようとしています。私が所属しております比較教育学研究室では、各院生が世界各国の中から研究対象国を選択し、その国の様々な背景を理解したうえで教育現象を考察しています。私は学部の卒業論文の時分からフィンランドを研究対象国にして、これまでは特に教員養成を中心として研究を進めてまいりました。フィンランドは経済協力開発機構 (OECD) による生徒の国際学習到達度調査 (PISA) での好成績によって注目を集め、日本でもフィンランドの教育に関する書籍が多く出版されていますが、フィンランドの教育を専門とした研究者はまだごく少数です。修士課程に進学してからは幾度となくフィンランドへも足を運んでいます。フィンランドを外から理想郷としてみるのではなく、冷静にあらゆる角度から考察することを常に心がけています。

修士課程では主に研究のインプットが活動の中心でしたが、博

士課程に進学してからは学会発表や論文執筆を通しての研究のアウトプットの機会が増

てきました。また自身の研究活動を認知してもらうことで、学外の教育機関の研究者との交流も活発になり、フィンランドの教育全体についての知見を求められることが多くなってきました。フィンランドについて幅広く理解し、また自身の発信する情報についての信憑性を担保することの必要性を痛感しております。

フィンランドの教育を研究対象として研究を遂行してきましたが、その過程では多くのフィンランドの関係者の方々の恩恵を受けてきました。直接その方々にお返しをすることはできませんが、少しでも私の研究が誰かの役にたつように、そして間接的にでもお返しができるように今後も研究に勤しんでまいりたいと思います。

社会人院生から

臨床実践指導学講座 博士後期課程1年 高橋寛子



臨床実践指導学講座に入学し、『京大型心理臨床』の真髄に触れる驚きと戸惑いの中で、早くも数ヶ月が経ちました。

私は学生相談の専任カウンセラーとして23年間勤務し、現場での実践を重ねてまいりました。現在、院生・カウンセラー・実践教育の教員という立場で、連環しながらも質の異なるいくつかのフィールドを行き来するという新しい歩みを始めたところです。

長年心理臨床の世界に身を置きながら、また大学という場で仕事をしながら、臨床実践・教育・研究という本来切り離されようのないもの、また切り離されてはならないものが、時としてかけ離れてしまう現実疑問を抱いてきました。入学を志望したのも、その問いを深めたいと考えてのことでした。本講座での研究は、各自の地道な臨床実践を基に、それらを高い次元から捉え直し、有機的に結びつけ、生きたことばを産み出すこと、さらにそれらを臨床教育につないでいく視点が求められます。毎週のゼミや事例検討の場において、総勢70名を超える教員と全院生とで行われるケースカンファレンスを通して、これまで確かだと感じら

れていたことが、なんと寄り辺無く心許ないものであったのかに直面し、愕然とすることも度々です。

ここ数年教育臨床の現場では、事件・暴力・訴訟といったこれまでにない緊迫感に曝されることも多く、カウンセラーに瞬時の判断、対応の幅の広さ、組織マネジメントなど柔軟性、応用力、強靭さが以前にも増して求められていると感じます。そうした厳しさ、慌しさにも片足を置きながら、人(クライアント)と人(セラピスト)との生きた相互関係を、静かに丁寧に見据える研究を志していきたいと考えています。

東京から京大への通学の道のりは、考えていた以上に大切なものとなっています。自身の非力さ、覚束なさに向き合いながら、なお実践と研究の歩を進めていくのだという意志と覚悟とに迫られる時間は、毎週私に必要なときとして用意されているように思えてなりません。

臨床教育実践研究センターから

臨床教育実践研究センター 特定助教 高嶋雄介



臨床教育実践研究センターの大きな特徴の一つは「一般の方々に開かれている」点にあります。当センターの中心的な役割を果たしている心理教育相談室は1953年に非公式にはじまり、その後、一般の方々に門戸を開いて現在に至るまで日々絶えることなく相談活動を継続してきております。また、そうした相談活動の実践や研究を通して得られた知見を社会に広く発信するために、毎年、公開講座とリカレント教育講座という事業を開催しています。公開講座は、一般市民や心理臨床家、教育関係者を対象に開催されるもので、当センターがお招きした外国人客員教授に現代のこころの問題に関する講演をしていただいております。今年度は、スイスを中心に活躍しておられるアラン・グッケンビュール先生(ユング派分析家)に「仮面の下の涙:過剰な適応が苦しみにつながるとき」というテーマでお話していただきました。定員をはるかに超える沢山のお申し込みをいただき、早くに申し込みを締め切らせていただいたため、ご参加いただけなかった方々にはご迷惑をおかけいたしました。来年度以降も引き続き魅力的な公開講座を開催できるよう取り組んでいきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

また、第13回リカレント教育講座(昨年度2月開催)では、「学校の成長と支援」を全体テーマとして、シンポジウムと事例検討会(分科会)を行いました。現在の学校現場では、教師やスクールカウンセラーなど様々な専門家が協力しながら子どもたちを支援していくことが重視されています。1人の子どもの支援や学校で起きる問題を通して、学校が全体としてどのように成長していけるのか、具体的な事例に基づきながら、その可能性について議論が深められました。

日々の相談活動の実践でわき上がってくる疑問や課題に真摯に向かい合うこと、それらを研究という形に洗練させ、広く社会に発信し、議論を深めること、そして、そこで得たものを再び日々の相談活動に還元していくこと、臨床教育実践研究センターでは、こうした「循環」を大切にしながら活動を続けていきたいと考えております。今後とも、ご支援たまわりますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

事務室から

専門職員（総務掛長）

谷川嘉奈子



昨年度は、耐震改修工事による度々の引越しなどで慌ただしく過ごされたと思いますが、今年度は、教育学研究科本館のリフレッシュとともにスタートし、教職員・学生とも新たな気持ちで再稼働されたと思います。改修後の住み心地はいかがでしょう。

私個人的には、工事完了後の7月に教育学研究科へ異動となりましたが、建物の明るい雰囲気がとても気に入っており、什器類もきれいで居心地は抜群です。

一方で、国立大学法人での住み心地は、運営費削減の波とともに、ますます厳しいものになっていきそうです。

今後は、京大の運営費が毎年大幅に削減されるかも、というなかで、この高等教育機関を支えるためには何ができるかを、事務職員も一人一人が考え、取り組んでいかなければならない時になってきました。

また、平成22年度給与改定の通知でもお知らせしましたとおり、教職員の給与も厳しい状況が続いております（特に中高年齢層のみなさま）。「社会一般の情勢に適合したもの」ということで

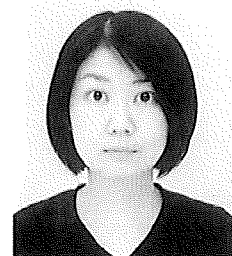
納得せざるを得ないのですが、「俸給支給額がアップしたのは、何年前のことだったかなあ。」という方が本研究科でも多くいらっしゃるのではないのでしょうか。

こういった状況のなか、事務組織でも業務改善の取り組みが進められておりますが、簡素化・効率化を進めるうえでは、「現場の声」がとても大切だと思います。普段事務室と接するうえでお気付きの点がありましたら、どしどしご意見をお寄せください。本研究科のような小規模部局では特に、風通しの良い気持ちの良い職場づくりが、ひいては研究科の躍進へと密接につながっていくと思います。事務室としても、教員・スタッフの方々と関係を密にして、サポート体制の充実をより一層図っていきたいと思っていますのでよろしくお願いいたします。微力ではありますが、私も精一杯がんばります。

図書室から

専門職員（図書掛長）

梶山暢子



5月末に今年度の再配置を終えてからはや半年あまりになりますが、新しくなった図書室、ご利用いただいておりますでしょうか。2009年7月からの長期間いろいろとご不便をおかけしましたがひとまず通常営業に戻り、火曜日・金曜日の夜間開室も行っております。

さて、最近の図書室の話題をいくつかご紹介します。

●前号で予告の通り、地下書庫・閲覧室で無線LANが利用できるようになりました。電源コンセント付きの席もありますので活用ください。

●調子の悪かったマイクロリーダプリンタのメンテナンスが終わり、利用可能になりました。

●平成22年度大型コレクションとして『国立国会図書館所蔵昭和前期刊行図書デジタル版集成、社会科学部門（教育）』（DVD-ROM版）の購入が認められました。昭和元年～24年に刊行された教育に関わる分野の図書8,775タイトルを収めたDVDセットです。現在整理中ですが、近日中に利用可能になります。当室だけでなく、学内限定ではありませんが

ネットワーク上での利用も計画中です。ご期待ください。

●前号で分散していた資料

の集中化をお伝えしましたが、KULINEの所蔵情報で「配置場所」が「別棟閉架」と表示されるものについては引き続き出納方式での利用をお願いしております。来年度夏には地下書庫に統合予定ですのでいましばらくご不便をおかけしますが、ご了承ください。

今回は少し散漫なお話になってしまいましたが、図書室とはみなさんのご要望を受け、日々成長していく施設でもあります。備え付け図書のリクエストや、質問等、お気軽にお寄せください。

これから論文執筆や後期試験等で図書室がもっとも賑わう時期に入ります。年末年始の休室もありますので資料の収集はとにかく早めが吉、存分にご活用いただければと思います。休室期間については図書室ウェブサイト、京都大学図書館機構サイト、掲示などで別途お知らせしております。ぜひご確認ください。

グローバルCOE:ブータン王国教育調査

比較教育政策学講座 教授、ユニットB 杉本 均



グローバルCOEユニットBに関しまして、私は教員プロジェクトの管理・統括・シンポジウム企画、育成支援委員会(海外留学支援、院生研究費の運営)の委員長、京大・慶応大COE共催シンポジウムの企画などを担当しています。

今回はユニットBの教員プロジェクト6件のうち、私が過去3年間企画・推進してきました、ブータン王国の若者の幸福感調査、「近代教育のオルタナティブ・システムに関する国際比較研究」をご紹介します。きっかけは世界の国民の幸福感に関する近年の国際調査でした。それによると、経済水準の高い日本人の幸福感は世界90位以下なのに対して、ヒマラヤの最貧国とされるブータン人の幸福感は8~13位と世界の上位にありました。ブータン王国はチベット仏教の一派を国教とし、第4代国王のもとで、1976年以来国民総幸福量(GNH)という概念を提唱し、経済発展とは別のオルタナティブな文化発展を追求してきました。2008年民主化を行い、立憲君主制に移行することによって伝統と近代の調和ある融合を目指しています。

この研究の目的は、そうしたブータンの若者の幸福感の特徴と源泉について分析するとともに、近代教育制度の発展が、その増進に貢献しているのか、あるいは逆に阻害要因となっているのかについて検討することです。伝統的なチベット仏教の僧院における宗教教育が今日も存続している中で、近代学校において英語を流暢に話し、インターネットを使いこなし、試験勉強にあげられるブータンの若者は、幸福といえるのか、近代教育とは何か、過去10年間の研究の蓄積と合わせて比較分析を試みています。これまでに2008年、09年、10年と3回ブータンに渡り、苦勞の末急峻な地形のほぼ全土を訪れ、20を超える教育機関においてインタビューを行うとともに600名を超える若者に質問紙調査も実施しています。中間の成果報告はCOEの紹介本『心が生きる教育に向かって』(子安増生編、ナカニシヤ出版)に寄稿していますのでご覧ください。

教育実践コラボレーション・センターから

コラボレーション・センター関連 特定助教 趙 卿 我



教育実践コラボレーション・センターは、京都大学大学院教育学研究科の「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」を専属的に推進すべく、2007年4月に新設されたセンターです。本センターの目的は、現場から持ち込まれた具体的な問題に対し、異分野融合チームを組織するなど教育学研究科としての専門的かつ組織的な対応が可能となるよう、一連の活動をコーディネートすることにあります。

本センターは、「学校教育改善ユニット」、「新しい教育関係ユニット」、「教育空間創造ユニット」、「E.FORUM」という4つのユニットを活動の柱として、今年度も教育現場とのコラボレーションを進めています。まず、「学校教育改善ユニット」では現在、京都市立高倉小学校、寝屋川市立田井小学校をフィールドとして、教師の授業力を高めるために、本学大学院生が、授業の計画・観察・振り返りを現場教師とともに実施する取り組みを進めています。また、「新しい教育関係ユニット」では、不登校の子どものための学校である京都市立洛風中学校において、事例を検討するカンファレンスなどを通じ、学校運営に関して助言を行っています。「教育空間創造ユニット」では、京都府で唯一の「村」である相楽郡南山城村の野殿・童仙房地区において、本学大学院生が中心となり、地域住民と共同して新しい教育空間を創造する試みに着手しています。「E.FORUM」は、学校や地域の教育改革を推進するスクールリーダーの育成・能力の向上を図るため、毎年、研修の場を提供しています。こうした各ユニットにおける個別のコラボレーションを今後は、領域横断的で組織的なものへと発展さ

せることを目指しています。また、各学校が抱える実践的問題を本センターが窓口となって受け、特に深刻な事案に対して、研究科としてその原因の理解と対処に取り組めるよう、体制の強化をはかっています。

今年度は、この3年間の成果と課題を踏まえて、さらに活動の質を向上させるべく研鑽しています。とりわけ11月には、本センター主催で「子育ての危機に迫る」と題したシンポジウムを行い、各ユニットの協働によるコラボレーション活動ならではの多角的な観点から、「子どもと子育て」に関する学校・地域・家庭・行政の諸問題にアプローチし、発信することができました。また、「東アジア共同体」構想を意識して、中国・韓国との文化・教育的交流を推し進めていることが特徴です。国際関係では、センター企画として10月に公開シンポジウム「中国の教育改革構想—これからの十年—」を開催しました。中国中央教育科学研究所所長の袁振国氏から近年の教育改革の方針・重点内容・方法について、直接ご意見を賜る貴重な機会となりました。

今後こうした教育研究プログラムや関係機関との情報・意見交換を積極的に行い、活動を共にしながら、教育環境や教育問題に実践的・学術的に貢献していきたいと考えています。今後とも教育実践コラボレーション・センターの活動にご理解とご協力をいただき、ご助言を賜りますよう、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

留学生から

伝統芸能から生涯学習へ歩む

生涯教育学講座 修士課程1年 宋 佳



中国・上海からやってきた私は、留学するまで上海の専門学校で教師として働いていました。約3年間の専門学校での仕事を通じ、多くの学生と接するうちに、学校教育以外の教育にだんだんと興味を持つようになり、もっと知りたいと思うようになりました。専門学校で成人教育に関わった経験を通して、伝統文化と成人教育が乖離していく傾向を感じました。そして、学校教育以外の教育・学習において、人びとがどのように伝統文化・芸能と接触し、何が得られるか、ということに興味を持ったことをきっかけとして、研究をしたいと思い、京都大学大学院教育学研究科に入学し、勉強しています。現在は、中国の伝統芸能の代表である京劇を事例として、伝統芸能の継承様式とその変容について研究しています。

長い歴史を持つ中国は伝統芸能の衰退という問題に直面しています。われわれの伝統を次の世代にどのように伝えていくか

はすでに深刻な問題になっています。中国文化と近いところが多い日本で同様の問題がどのように扱われているかを知りたいと考えています。渡邊洋子先生をはじめとする「『伝承・習い事』文化における継承と生涯学習の現代的課題に関する日中韓比較研究」研究会に参加させていただいていますが、それは自分の研究にとって貴重な機会になっています。特に、日中韓三国の研究者たちの発表、議論、交流を通して、東アジアという共同文化圏の視点から見た伝統芸能の継承に関わるさまざまな示唆を得ることができました。落語が好きな私は、現在の研究と並行して日本の伝統文化と伝統芸能をさらに体験し、味わい、自分なりの生涯学習をつくりたいと思います。

和田名誉教授受勲

11月3日の新聞でも報道されましたように、本研究科の和田修二京都大学名誉教授が、平成22年度秋の叙勲におきまして瑞宝中綬章を受章されました。

和田名誉教授は、1932年に生まれ、京都大学大学院教育学研究科を修了されたのち、京都大学教育学部助手、奈良女子大学講師を経て京都大学教育学部助教授に就任され、以後、教育学部学部長・研究科長・京都大学評議員、教育哲学会代表理事(会長)、関西教育学会会長などを務められ、学内外で重責を担われてきました。退官後も佛教大学、名古屋女子大学で教鞭をとられ、教育と研究に貢献されてきました。

和田名誉教授は、教育人間学研究者M.J.ランゲフェルトの「子どもの人間学」を存在論から捉え直し、独自に展開した規範的実践的な子ども-大人の人間学としての教育学を構築しました。『子どもの人間学』はその成果で、これは日本の教育哲学研究の金字塔というべき優れた業績であり、韓国でも翻訳されました。またこの人間学をもとに、ポスト近代を展望して歴史と文化を反省した教育人間学を新たに構想し、日本におけるポストモダンの教育学研究を先導されました。

さらに子ども-大人の人間学に基づく「臨床教育学」を構想し、学問としてその性格を明らかにしただけでなく、京都大学での臨床教育学専攻の設置にも寄与されました。「人間の生涯と教

育の課題』『教育する勇気』『教育的日常の再構築』『臨床教育学』『教育の本道』『何が親と教師を支えるか』など優れた著作をつぎつぎと単著・共著として出版され、教育哲学研究者のみならず広く教育関係者に影響を与えてきました。

近年では今年『仏教と教育学』と『敵味方をこえて平和を織る』を共著で出版され、さらにまたランゲフェルト没後20周年を記念して『ランゲフェルト教育学との対話』(2011年出版予定)を編集されるなど、現役の研究者としてご活躍されております。

受章のお祝いを申し上げますとともに、ますますのご活躍とご健康を願っております。

臨床教育学講座 教授 矢野智司



諸 記 録

◆ 2010年5月～2010年11月のおもな出来事

【2010(平成22)年6月】

24日(木) 大学院進学説明会(法経第四教室)

【2010(平成22)年7月】

10日(土) 教育学部同窓会

23日(金) 第25回GCOE主催講演会「Culture and well-being: A new inquiry into the psychological wealth of nation」大石繁宏博士(米国ヴァージニア大学、京都大学芝蘭会館別館)

24日(土) 教育実践コラボレーション・センター主催「第5回風と雲の広場・手づくり村 ミニのどう〜つくる×はたらく×まなぶ〜」(京都府南山城村旧野殿童仙房小学校)

24日(土) 「世阿弥に学び、物語を楽しむ」会実行委員会主催・教育実践コラボレーション・センター共催ワークショップ「世阿弥に学び、物語を楽しむ」(錦鱗館)

【2010(平成22)年8月】

11日(水) 教育学部オープンキャンパス

18・19日(水・木) 第8回GCOE主催国際シンポ「第4回京都大学・ロンドン大学合同国際シンポジウム Finding Meaning, Cultures Across Borders: International Dialogue between Philosophy and Psychology」(百周年時計台記念館)

18～20日(水～金) 教育実践コラボレーション・センター主催「2010年度E.FORUM全国スクールリーダー育成研修」(吉田キャンパス)

【2010(平成22)年9月】

4日(土) 京都大学教育学部・東京大学教育学部合同市民公開講座「高校生・大学生・大学院学生のための進路セミナー『学校の先生』という仕事」(芝蘭会館/稲盛ホール)

6日(月) 第11回GCOE主催ワークショップ「International Workshop on Psychological Science: New Approaches to Language, Action, and Semantics」(教育学部本館)

【2010(平成22)年10月】

6日(水) 第26回GCOE主催講演会「The Problem of Recontextualisation」P.ダウリング博士(英国ロンドン大学教育研究所教授、総合研究2号館)

7日(木) 大学院進学説明会(百周年時計台記念館)

18日(月) 第27回GCOE主催講演会「Exploring an Implicit Measure of Acceptance」C.ドレイク博士(米国サウス・カロライナ大学助教授、吉田南総合北棟)

19日(火) 中国・中央教育科学研究所との学術交流協定締結

19日(火) 教育実践コラボレーション・センター主催シンポジウム「中国の教育改革構想—これからの十年—」(芝蘭会館研修室)

24日(水) 教育学研究科附属臨床教育実践研究センター主催・教育実践コラボレーション・センター共催公開講座「仮面の下の涙—過剰な適応が苦しみにつながるとき—」(京都テルサ第一会議室)

28日(木) 第28回GCOE主催講演会「SuperSense: The Developmental Origins of Adult Supernatural Beliefs」B.フッド博士(英国ブリストル大学教授、総合研究2号館)

28～30日(木～土) 教育実践コラボレーション・センター主催 高見茂教授学術講演会・集中講義(北京師範大学)

【2010(平成22)年11月】

6日(土) 教育実践コラボレーション・センター主催シンポジウム「子育ての危機に迫る」(学術情報メディアセンター南館地下講義室)

24日(水) 第29回GCOE主催講演会「グローバルCOE公開講演会・公開講座:心が活きる教育を進めるもの、阻むもの」(百周年時計台記念館)

◆平成23年度入試結果

| 教育 学部 | | 日 程 等 | 募集人員 | 志願者数 | 受験者数 | 合格者数 | 入学者数 |
|-------|-----|---------|------|------|------|------|------|
| 前期日程 | 文 系 | | 50 | | | | |
| | 理 系 | | 10 | | | | |
| | | 第3年次編入学 | 10 | 23 | 19 | 7 | |

| 教育学研究科 | | 課 程 等 | 募集人員 | 志願者数 | 受験者数 | 合格者数 | 入学者数 |
|------------------|---------------------------------|-----------|------|------|------|------|------|
| 修 士 課 程 | 研究者 養成 コース | 教育科学専攻 | 18 | | | | |
| | | 臨床教育学専攻 | 14 | | | | |
| | 教育科学専攻(専修コース) | | 10 | 47 | 46 | 10 | |
| | 臨床教育学専攻(第2種) | | 若干名 | 4 | 4 | 0 | |
| | 博士後期課程臨床教育学専攻 (臨床実践指導者養成コース) | | 4 | 8 | 8 | 3 | |
| | | 博士後期課程編入学 | 若干名 | | | | |

()内の数は外国人留学生で内数

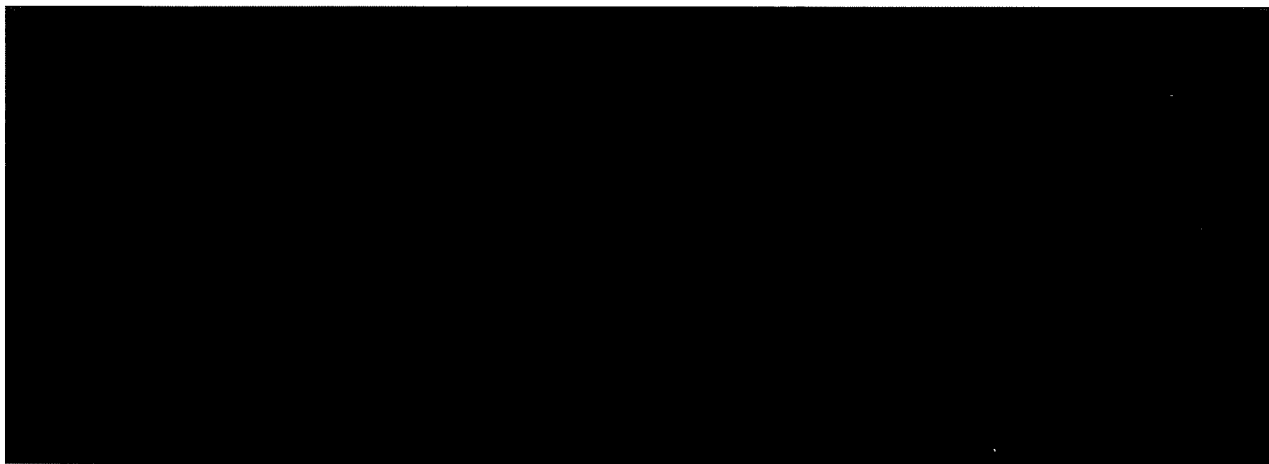
◆平成22年度学位授与件数

(H22.10.1現在)

| 学 位 名 等 | | 授与者数 |
|---------|---------|------|
| 学 士 | 教育科学科 | |
| 修 士 | 教育科学専攻 | |
| | 臨床教育学専攻 | |
| 博 士 | 課程博士 | 5 |
| | 論文博士 | 0 |



◆人事異動 (H22.6.2~H22.12.1)



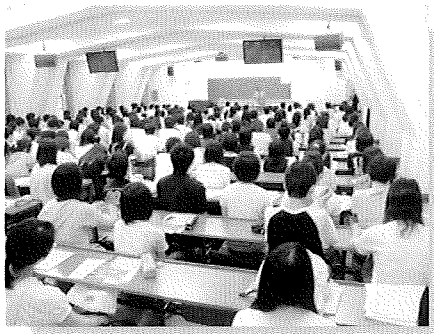
◆寄附金受入

| 寄附金の名称 | 寄 附 目 的 | 寄 附 者 | 研究担当者 |
|--------------------------|-----------------------------------|----------|-------|
| スーパービジョンの充実に 向けた実践的検討 | 「スーパービジョンの充実に 向けた実践的検討」に係る研究助成 | 日本心理臨床学会 | 皆藤 章 |

◆科学研究費補助金

| 研究種目 | 研 究 題 目 | 研究担当者 |
|---------|---------------------------------|-------|
| 新学術領域研究 | 顔表情が行動出力に及ぼす影響に関する認知神経科学的検討 | 野村 理朗 |
| 若手研究(B) | 衝動的行動とその制御メカニズムの解明に関する認知神経科学的研究 | 野村 理朗 |

◆ オープンキャンパス2010開催



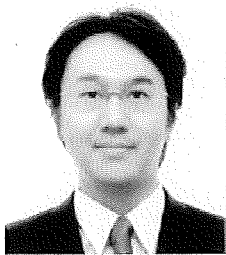
平成22年8月11日(水)、12日(木)の両日、「京都大学オープンキャンパス2010」が開催された。

本学部においては、8月11日(木)12時30分から実施し、392名の参加者があった。

当日は、辻本雅史学部長の歓迎の挨拶、佐藤卓己准教授の模擬授業、授業担当教員との意見交換、各系の説明と質疑応答が行われ、会場は参加者の熱気にあふれた。また、終日、学生相談員が個別相談にあたり、参加者からは教育学部ではどんな勉強をするのか等の相談が寄せられ、予定時間を超えて対応した。

諸 報

◆ 新任教員・事務職員紹介（「」内は本人の抱負）



野村 理 朗 准教授

所属講座：教育認知心理学講座
専 門：認知神経科学

「重厚な建築、濃厚なアカデミズムに酔う日々です。その基底をなす伝統を継承し、発展へと微力を結びつけてゆけますよう、ご指導よろしく願います。」



谷川 嘉 奈 子

専門職員（総務掛）

「7月からお世話になっております。みなさんにいろいろと教えていただきながらコツコツとがんばっていきたいと思っています。どうぞよろしく願います。」

～ 編 集 後 記 ～

「ニューズレター」21号をお届けします。耐震工事が終わって心機一転迎えた今年度、夏の猛暑が9月に入ってもまだ続いたときには、いったいいつまで続くのか、そしてちゃんと暑さが収まるのが本当に心配になりました。実際には、しっかりと寒い冬が訪れ、もう来年春の暖かさを待つ日々です。

一方で、大学と研究科・学部をとりまく逆風は依然として衰えることなく、これがいつまで続くのか、「次の季節」がちゃんとやってくるのかまったく先が見えません。もしかするともっと厳しい「冬」がやって来るのかもしれないですが、現在の状況に対応しながら先を見据えて足腰を強くしていくことが大切だと感じています。(HN)



京都大学教育学研究科
・ 教育学部広報委員会

委員長 松木 邦裕 教授(臨床心理実践学講座)

委 員 辻本 雅史 教授(教育学研究科長・教育学部長)

委 員 南部 広孝 准教授(比較教育政策学講座)

委 員 明和 政子 准教授(教育方法学講座)

委 員 吉井 晃 事務長

委 員 谷川嘉奈子 専門職員(総務掛長)

委 員 西本 幸江 専門職員(教務掛長)

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛
TEL 075(753)3003